

<前頁より>

では、障害のある人達の地域生活を支えるためには、どうあるべきかについて考えてみると、現状では地域で生活している知的障害者はほとんど家族と一緒に暮らしている。すなわち家族によって大半の知的障害者は支えられていることになっている。これから地域での生活支援を考えるうえでは、地域の人たちが正しい理解をもつようなはたらきかけや地域で支え合う仕組みが必要です。つまり「地域で支えるネットワークづくり」をつくることです。

障害者福祉施策は変化してきているが、では果たして内容が改善され地域の環境や整備がすすんでいるのかについてはたえず検証しなければならない。

障害者福祉を進めるときのチェックポイントとして、

- ・障害者問題を「障害のある人と家族だけの問題」にせず、「国民一人ひとりが自分の問題」として理解しているか？
- ・障害者福祉が、「特別な人達の福祉」ではなく、「一人の人間として、また普通の国民の福祉」として受け入れられているか？
- ・障害者が「安心して暮らすことのできる街づくり」は進んでいるか？

これらのポイントを単なる権利主張・要求だけではなく、民間（市民）をベースとして、行政と協働作業で取り組んでいくことが大事である。

全般を通して、地域とのつながりを構築することが重要であることを述べておられました。それは、氏も記述されているように、障害者運動の原点につながる取り組みである「多様な価値を認め合い、支え合う共生社会をつくる」ことそのものではないでしょうか。

講演の途中では、氏が因島で取り組んでおられる支援の取り組みを中心としたDVDを上映しました。

上映の前段階では、地域で生活するための大切な三つの要素の見直しを挙がっていました。

- ・本人の力：体験、支援が大事（指導、訓練ではなく）
→親からあれこれうるさく言われて自分自身でやりたいことをする経験が少なく、意欲をもって行動する機会をなくなってしまう。

- ・生活への援助：出来ない部分だけの援助

(過剰にならないよう)

→まわりのペースに本人を乗せてしまうだけでは、何もできなくなる。それは、生きるというよりは生かされている人生を送っていると言わざるをえない。

- ・地域の理解：慣れる

(地域の人達自身が共に生活する社会に慣れる)

→啓発だけでは限界がある。共に生活をする社会こそ自然なあり方なので、本人に力をつけるトレーニングばかりではなく、地域が理解して慣れていくことが必要である。

こうしたことを踏まえて、本因坊秀策誕生の地で知られる尾道市因島での活動実践を映像でご紹介いただきました。

作業所に通われているみなさんが、地域の路線バスで通勤している場面では、バスの乗降車に際しても利用される方たちのペースに合わせています。いかに当事者についての理解が深まっているかが伝わってきます。

作業場では給食などの残飯をリサイクルして肥料にするなどの活動も紹介されました。競争入札でも作業が得られるのは、どのタイミングでも必要に合わせて取り組むことの出来る融通性があればこそで、他では対応が難しいことが受注するメリットになっているとのこと。その他の場面からも、地域とかかわりながら当事者とともに日々の生活がすすんでいる様子がうかがえました。

引き続いて、補足的に法人で取り組んでおられることにも触れておられ、例えばこれまで支援者と一緒に行っていた（行事としての）旅行についても、当事者が主体となって企画して旅行会社を通じ自分たちだけで行く。

(そのほうが、あれこれ指示されたりしないので楽しく行ける。もともと野球のナイター観戦を自分たちだけで行った経験がもとになり、その延長が旅行となった。) こうした自分自身の想いを発信したことが相手に通じて実現したという経験が次につながって、自分たちで出来ることが多くなっていくよい流れが生まれるということでした。

そして生涯にわたる支援体制への取り組みとして、親子ともども高齢化していくなか、高齢者施設・障害者施設と別々の施設で暮らしては、お互いの心の支えを失うことになりかねない。そうしたことを防ぐために「ケア付き家族マンション」を整備しています。家族関係を壊さずに、自立を図るとともに、生きがいを高めて生活の充実と安定を目指すものです。ここでもいきつくところは「地域づくり」と「家族支援」の視点がポイントということです。

それぞれ地域性により環境が違うということはあるかと思いますが、おかれた状況の中でお話いただいた考え方を参考にして、地域の特性に合わせた「地域で支えるネットワークづくり」が構築できるのではないかと強く感じた講演会でした。